

久庄次郎 四十年の軌跡

冠
罐
歡

カン

カン

カン

久金属工業株式会社 創業百周年記念



久庄次郎 四十年の軌跡

冠カン
鑽カン
歡カン

冠と鑽づくり情熱を傾け、
研鑽と信頼に歡びを見いだす、
久庄次郎の半生記。

本文中の敬称は略させていただきます。



久庄次郎 昭和29年



田村孝之介 洋画家

大阪市生まれ。

一九二六年 二科展に初入選

一九七四年 二紀会理事長

一九八五年 文化功勞者

母方の親戚にあたり、戦後一時期、
庄次郎のもとに身を寄せていた。

はじまりのとき

大正四年

桜川時代

連なつて見える蔵屋敷の輪郭だけを際立たせて、阿弥陀池の塔を染めながら灰赤色の空に夕日が沈んでいく。前を通る市電の軋んだ金属音が湊町方面へ遠ざかっていった。カンカンカンと階下でプレスの型を交換する音が聞こえる。「これからやなあ。ほんまに頑張らなあかんのは」

庄次郎は心の中でつぶやいた。

長かったようにも一瞬のようにも思える中野工業所での修行がようやく実りつつあったこの時、十一才でこの道に入って

休む間も惜しみ、努力を積み重ねて十九年が経とうとしていた。

工場ではその腕の右に出るものはなく、習得した技術は当時の水準を

遙かに上回るものではあったが、庄次郎はすべてが勤勉さと忍耐、

繰り返された試行錯誤の結果であることを密かに肝に銘じていた。

開業を後押しした縁者や助力してくれた人々への感謝の念も少なからず抱いている。

僅かな給金を蓄えて創業の資金とし、こうして独立の道を築くことができたのは

「地道な作業を続ける」ということの上に成り立っていることも納得していた。

開業時の従業員に、「越前」「エーヤン」などと呼ばれる北陸地方の出身者が

多かったのも庄次郎が忍耐や努力を重視していたことが理由のように思われる。

二階建ての民家を使った工場は間口三間、奥行き五間。

そのうちの玄関に近い一階の五坪ほどが作業場になった。

奥は居間に使われ、二階は住み込みの従業員との寝泊まりの場であった。

土間になった作業場には手動式、足踏み式のプレス機、大小合わせて八台が並んでいた。

天井からは数年前に発売されたマツダの電球がアルミの傘の下でまばゆい光を放っている。

納期が迫ると作業は遅くまでかかることもしばしばで、電球は贅沢と思われたが

製品の精度を保つために必要な出費と自分を納得させていた。

庄次郎はこの後も、折を見て思いきった投資をすることがあった。

いずれも時代の先読みがその判断を決定する根拠になるのだが

決して博打的なものではなく、一見相反するようだが、

堅実な経営と表裏一体のように思われる。

運を味方につける才覚もあったようである。



開業当時の久 庄次郎



庄次郎が通った西六小学校

先を読み、試みる日々

仕事の受注先は川口町界隈に集まっていた貿易商からの依頼品が中心で、輸出用の鏡付きのタバコ缶やマッチの缶を製作し納品していた。

当時、第一次世界大戦の影響もあって国内の景気も高揚し、多くの産業が新たな事業へと息づき始めていた。

しかし、貿易商を営んでいたのは華商が多く、対華二十一ヶ条を中国に突きつけた影響で取引も日々険悪な状況に変わりつつあった。

今後の日中関係を危うく感じた庄次郎は、次第にこの仕事から手を引くことを考えるようになっていた。

入札制度で製品の価格を低く抑えられ、薄利が経営を圧迫し、堅実な製品を作れなくなることも意に反することであった。

これに代わり手がけたのはウイスキーのポケット瓶の蓋や

瓶詰め美容クリームのアルミ蓋があった。この頃国産のウイスキーはまだなく、輸入のものを鳥井商店（現サントリー・ホールディングス）などが

小さな瓶に詰め替えて販売していた。ガラス栓にコルクをつけた中蓋の上から

アルミ製のキャップを被せた手のこんだポケット瓶が作られていた。

主力となったのは化粧品容器の蓋。これまで歯磨きなどを中国をはじめ、

アジア諸国に輸出していた松本竹商店は化粧品を製造し始めていた。

各国に人気を博していたようで、ポマード、クリームなどのガラス容器の

アルミ蓋が大量に発注されたのである。

これらの実績や評判を聞いてか、金鶴香水（現マンダム）のキャップなども受注するようになっていた。

創業から三年が過ぎようとしていた。

口金や蓋が中心に移ってきた事業が軌道に乗り始めたこともあって、

大正七年の暮も押し迫った頃、庄次郎は妻を迎えることとなった。

嫁いできたフサは庄次郎と住み込みの従業員の身の周りの世話だけでなく帳簿付けなどにも精を出し、事業を支え続けたのであった。

工場はというと、機械と増えた従業員で足の踏み場もない状態が多く宿舎、居宅を兼ねていたのはいよいよもって手狭になってきたのである。

「こら、なんとかせな」と方々に手を回し、移転先を探る日が続いた。

が、製品作りに明け暮れ、移転が実現するまでに一年近くも要することになる。



美容クリーム瓶



金鶴香水（蓋）



フラワークリーム（蓋）

飛躍のための動力源は・・・

大正八年

堀江時代

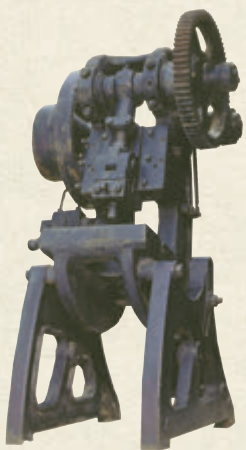
西区南堀江下通り一丁目十八番地。

新しい工場は主要取引先となっていた松本竹商店の近くに構えることになる。同じ造りの家屋二軒を、工場と住居に分けて使うように設えたが、それでも足りずに、向かいに倉庫を借りることでようやく形が整ったように思えた。製造に携わる人員は、庄次郎以下十人程度までに増え、居宅の二階にはいずれも福井出身の「ぼんさん」と呼ばれた四人が同居していた。外注先として、プレス機に使用する金型は以前から技術力を信頼していた西関谷町の総田鉄工所に依頼していたが、難題を持ちかけ、苦勞を強いることも多かったようだ。営業面での変化も著しかった。取引関係にあった三好ガラスにて重席をなしていた乾善蔵氏（女優三益愛子の実父）を営業の責任者として迎え入れ、販売力の拡大を計っていた。乾氏の高潔な人柄に庄次郎が惚れ込み、破格の厚遇を持って口説いたようである。氏は、これに応じて交流の多かった瓶、ガラス関係の各社を訪ね、新規取引先の開拓に向かって大きな力を発揮していった。

蓋や口金の製造技術は確かなものと評判を得てはいたが、量産と単価の点では一考を要する時期になってきていた。これまでの足踏み、手動式では熟練の技術と時間が必要で、寄せる需要に追いつかなくなってきたのである。

また、複雑な形状や凝った意匠のものも多く、納期と品質を両立させることが庄次郎の頭を悩ませていたのであった。そして、ついに動力プレス機の導入に踏み切った。「これをなんとか動力でやりたい」それまでヘラ押しの手作業で作っていた菓子瓶の蓋を動力で製作する研究に取り組み、ようやく成功にこぎつけた。

動力プレス機の導入は、製品作りに大きなコストダウンをもたらし、製品単価は同業他社の及ばぬところとなった。菓子瓶の蓋の市場を席巻したのである。プレス機以外にも電動機を取り入れ、この時点での動力使用は二十数台のうち半数以上を占めるほどになっていた。そんな中でも庄次郎は、あえて自身の手を加えて精度の高い製品作りに時間を費やしていた。その力は他の者の追隨を許すことはなかったようである。



最初の動力プレス機



動力プレス機による菓子瓶の蓋

安定をもたらす優良企業との取引

動力機を導入することによって、定評があった製品の完成度に加え安定した供給と低価格を提供することができるようになった。

このことは、当然ながら新規の取引先を獲得する大きな力となり得たのである。

松本竹商店の貿易商品は中国だけでなくベトナム、マレーシアなど

東南アジア方面へも販路を広げ、これに続いた同業者も数多く出現していた。

これら新規参入の業者の製品もこぞって久に製作を依頼してきたのであった。

庄次郎は企業の明暗を分けることにもなる商品の製造に携わる者として

完成し世に出るまで、製造に関する守秘には思いのほか気を使っていた。

「あれも、久はんで作ってはったんか」後によく耳にする言葉であった。

この時期は後世まで名を残す企業の製品も多く手がけるようになっていた。

桃谷順天館の「美顔クリーム、ポマード」。キッコーマン醤油の口金。

種々の特許を持っていた庄次郎の実兄である西村卯兵衛氏からの紹介もあって

灘五郷を主とする酒造関連の製品も手がけた。

大正十一年

大正十一年頃からは、医薬品の容器や薬瓶の蓋を受注し始めた。

神戸衛生実験所（現 Bioフェルミン製薬）の Bioフェルミン。

藤澤商店（現 アステラス製薬）の「ブルトローゼ」。いずれの製品も密閉度と

素材の選択に時間を費やしながら完成度の高いものを納品できるようになった。

すでに寿屋を創立していた鳥井商店の主力商品であった

赤玉ポートワインの王冠の製造もこの頃始めたのである。

「嬉しいことは、続くもんやなあ」

業績が飛躍を遂げていたことに加え、庄次郎、フサの間に女兒が誕生した。

大きな腹を抱えて、臨月まで汗して働いた妻に感謝の念が絶えなかった。

祝いの言葉を聞きながら、目を細めて我が子を見やる庄次郎を

訪れた人々は「やっぱり、親やなあ」と微笑ましく見守った。

結婚や出産の時期を計画していた訳ではなかったが、

物事の流れとは不思議なものと庄次郎は思った。

研究を重ねて製品を創りだす優良な企業との取引が増えるに連れ、

菓子瓶の蓋などの価格競争の激しいものは工場から自然に消えていった。

飛躍の時期を越え、安定した需要を求めたことは成功したようであった。

関東地方を揺るがせた大震災も浪速の町までは届かなかったのである。



赤玉ポートワイン（蓋）（寿屋）



Bioフェルミン（蓋）（神戸衛生実験所）



この頃の久 庄次郎

うちしか、でけんもんを

「向かいの倉庫も、もうあきまへんな。いっぱいですわ」

ついに、材料や製品を置いておく場所の確保も難しくなってしまった。業績が上がると共に、工場内も常に混乱した状態が続いていたが、庄次郎は、すぐには拡張、移転に踏み切れない理由があった。

菓子瓶の蓋の件が気になっていた。機械化によって価格を下げる事ができた結果、過大な競争が始まり、やがて採算性が悪化する。

震災後のデフレも追い討ちをかけるような予感があったからである。

社会の情勢が定まらぬ前の拡張に一抹の不安を感じていたのだ。

しかし、信頼を受ける大切な得意先に迷惑をかけることはできない。

「他所では、でけん物を作ったらええんや」

技術力では負けない自信が庄次郎を新工場増設に向かわせた。

新工場は新たに動力プレス機八台他を購入し、浪速区小田町に百坪の規模で開設した。

堀江は営業所として残し、フサと乾氏他数名が事務関係と製品管理に携わった。

大正十四年

小田町の工場には新しく桑原桑次郎氏を工場長として迎えることになる。

竹を割ったような、白黒をはっきり言う性格が庄次郎の目に叶い、

個人で玩具の製造をしていたところを破格の条件付きで頼み込んだのである。

周りの者を驚かせた条件とは、工場長の傍ら玩具の製造を認めたことであった。

折原、東、下宮の三氏も桑原氏に帯同して参画。新体制を整えることができた。

プレス、ロール、シーマー他、総三十七台の機械と、新規採用を含めて

三十人ほどになった従業員を目の前にして庄次郎は気を引き締めた。

「しっかりせなあかん。皆の生活がかかっとる」

この頃すでに寿屋から受注していた「スモカ歯磨」の容器は

日に一〇、〇〇〇個を生産し、百七十円の売り上げを計上していた。

米の価格が下がっていたとはいえ、一俵一円の時代にある。

製品には高度なニス引きが不可欠で、寺町の林原に依頼した。

中山太陽堂（現クラブコスメチックス）、春源石鹸製造の石鹸缶は、

いわゆる美術缶として手間のかかる仕事ではあったが、

この分野では大阪一と言われた双葉印刷に依頼して、胸を張れる製品ができあがった。

こうして広くなった工場と優秀な従事者、協力会社のもとので、

久製作所は順風満帆に進んでいくように思われた。



スモカ歯磨の丸缶

足元を固めて不況に挑む

昭和二年

小田町時代

「えらいこつてすわ。近江が・・・」
町で話を聞きつけ、フサが息をとぎらせながら駆け込んできた。
取引銀行の近江銀行が破綻、休業したのであった。

先月から各地で取り付け騒ぎが続いてはいたが、「まさか」庄次郎は一瞬耳を疑った。
頭に浮かんだのは十日ほど後に迫っている末の勘定と賃金の支払いのことであった。

しかし、どう工面をつけたのか、取引先にもすべて現金で支払いを済ませた。

この時の人々の驚きは大きく、後々まで語りぐさとなって信頼が生まれた。

一方、工場では金鶴香水の「丹頂ポマード」、大日本除虫菊の「ペルメル」、
武田薬品の「アペチン錠」なども加わり、順調に稼働はしていたが、

比較的小さい物が多く、百坪の広さと製造能力には、まだ余裕があった。

恐慌の影響で得意先からの発注量の縮小が余儀なくされていたのである。

庄次郎は、以前手がけたこともある「缶もの」を思い浮かべていた。

「もう少し大っきいもんも、せなあかん」

そんな時、柏木氏の紹介で関西ペイントの塗料缶の話が持ち上がった。

到来した好機に、ここぞとばかり日課のように、足しげく尼崎へ通った結果、
専門外の商品ではあったが、なんとか関西ペイントと取引が始まったのである。

が、ここから紆余曲折の連続で、納得する製品の完成まで随分時間を要した。
特に苦労したのは塗料缶の「漏れ」に対する処理であった。

塗料が漏れるごとに、この頃まだ珍しかった単車にまたがり、

「えらいこつちゃ」と尼崎の神崎へ対応に走る担当、橋本氏の後ろ姿を見送ったものである。

庄次郎は外部よりこの分野の専門家の中村文定氏の協力を得てこれにあたった。
「ニカワ」「アラビア糊」など用いてようやく漏れを防ぐ仕様ができた。

この努力と成功は大いに評価され、他社と分け合っていた関西ペイントの発注が
この後、久に集中することとなったのである。

「事業は人なり」この時代の起業家が持っていた東洋的達見だが、
庄次郎にとっては日常的に実践していることであった。

不況や逆境に立ち向かうために必要なことは、

足元を固めながら、これから先の展望を明確にし、挑み続けること。

庄次郎は、得意先や従業員を守ることを一意としながら、

未曾有の恐慌を乗り越えようとしていた。



塗料缶（関西ペイント）



明色メンタム（桃谷順天館） ペルメル（大日本除虫菊）

移転、法人化、そして台風被害

受注と製造能力の均衡がようやくとれたと喜んだのも束の間で、ペイント缶の製作は、思いのほか広さが必要としたのであった。五・一五事件が起こり、国内情勢は不穏な空気を漂わせはしていたが、引き受けた仕事を投げ出すわけにはいかない。

庄次郎は再び工場の移転先を模索し始めたのであった。比較的、取引先が多く集まる北方面も移転先の候補が上がったが、ある人の世話で西成区津守町に工場の移転が決まった。

工場の建設が始まると、「あないな大きなもん造って何を入れはんねやろ」と、周辺の人たちが首を傾げるほどの建物であった。

このあたりの地盤は軟弱で、後々の心配をする人もいたが、「大丈夫や、まかしとき」

材木を扱っていた実兄の西村卯兵衛氏が吟味した建材を用いて造られ、三代は持つと豪語するほどのしつかりとした造りであった。

昭和九年

第一、第二工場、第一倉庫、鉄工部が完成し、大規模な移転が進められた。

堀江の営業所は取引先各社の便も考え経理部門を残すことに。

乾氏は新設した営業所に移り、フサは経理として残ることになる。

組織名を「合名会社久金属製作所」とし、法人格に変更。

工場は、工程の違いから口金部門と製缶部門を分離した。

新規に導入した機械を加えて並べると、庄次郎の技術者としての血が騒いだ。

社員数、設備、機器の規模は、小田町時代の倍を越えていたのであった。

企業の体を示した正門を見上げながら庄次郎は、

「やっと取引先に安心してもらえる」と、大きな息をついた。

よくぞこれまで、町工場同然の庄次郎を信用し、

仕事をさせてくれたものだと取引先に感謝の念が絶えなかった。

が、意気揚々と歩き出した庄次郎に、また試練がきた。

この年の秋、瞬間風速六十メートルを越える強風と四メートルの高潮で、阪神地方に甚大な被害を与えた室戸台風にみまわれる。

工場は一メートルほど浸水し、屋根が半分飛ばされてしまった。

復旧するまでに、一ヶ月を要し、休業を余儀なくされるが、

庄次郎と社員たちは一日でも早くと復旧作業に必死に立ち向かうのであった。



塗料缶（関西ペイント）



薬用缶（藤沢薬品／武田薬品／塩野義製薬）



第一工場内部

我が道を歩き続ける

津守町に新社屋を構えて三年が過ぎようとしていた。

台風の被害からも立ち直り、業績は右肩上がりに伸びている。

思えば、開業以来少なからず社会情勢の不安がついてまわった。

戦争、震災、恐慌。そして、今も軍国主義化が進んでいく。

「これから先、いったいどうなっていくんやろ」

庄次郎は業績とは相反した不穏な空気をいつの時も感じていた。

ただ、どんな時も自分の信念だけは通し続けてきたのである。

「納得する製品づくりと堅実な経営」「得意先を大切に守る」

その結果が今であれば、間違っていないのだと。

そして、また、一歩前に歩く時期が来たのである。

西側に第三、第四工場を建設。労務と社員食堂も新設をすることになった。

室戸台風の教訓から、始まっていた地下鉄三号線工事で掘り上げた土を使い

地盤を一メートル強、嵩上げをして不意の浸水に備えた。



この頃の久 庄次郎

昭和十二年

工場増設に伴い、新規に多くの人材の採用にも踏み切った。

会社を盛り上げていく中心的な存在の社員の育成にも力を入れる。

福利厚生の一環として、当時はまだ少なかった社員食堂や

社員寮の設置も従業者に対する庄次郎の考えが現れていた。

「良い商品」を提供するためには、労務管理、生産管理が

必要なことを理解して実践したのである。

庄次郎は、武士のような潔い性格を好み、その人柄を信頼した。

世界に写真植字機の開発に成功し、後に「モリサワ」を設立。

出版、印刷業界に偉業を残した森澤氏もその例に漏れない。

東京での写植機製造の共同経営から退き、帰ってきた森澤氏に

庄次郎は本社の向かいに工場を用意し螺子工場の開業を支援した。

この好意に対して、森澤氏は厚く恩義を感じて、三種の自動製缶機を設計した。

この製缶機は、五人掛かりで行っていた「ベルメル」「スモカ」の製造を

一人でこなせる優秀さで、大いに生産性を高めることになる。

庄次郎の人を見る目や接し方は、この後も変わることはなかった。

信頼し、互いのために尽力する大切さを身を以て示した。

中野工業所へ徒弟奉公に入ってから四十年、庄次郎五十一才の年である。



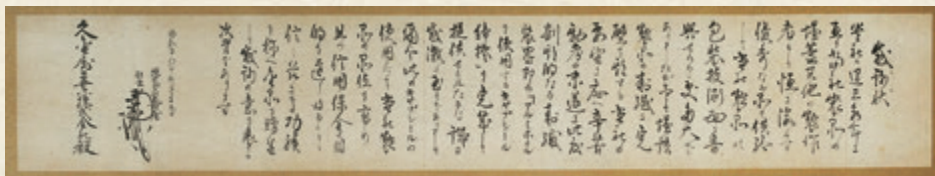
当時採用したタイムレコーダー

創業百周年を迎えて

創業から百年を迎えた久金属工業には、これまでご支援いただいた取引先との逸話が多く語り伝えられています。ほんの一部ですが・・・

見て習った、大切なこと。

「やってみるとくんなはれ」と鳥井信治郎さんに言われたかどうか、今日では定かではないが、輸入の瓶を参考にしながらの当初のキャップ製造には、随分苦労したようであった。鳥井さんは、その頃から、購入する人の気持ちを汲みながら、その要求に応えることで事業を営んでおられた。当然のことに、広告にも強い関心をもっておられて、常に時代の先取りをされていたのである。久の「流れと先を読む」は、これを見習っていたのであろう。戦後、アルミキャップシールの開発を成功させ、巻紙の感謝状をいただいた時の喜びはひとしおで、すぐさま表装をして社の応接室に掲げたのである。



感謝状（昭和28年）



キャップシール



国産第1号ウイスキーのキャップ



第1号の頃のキャップ



白浜ゴルフ倶楽部にて（竹鶴氏と久正）



竹鶴氏が自筆で歌をしたためた写真

伝説の三連続パー。

碁、謡曲、釣り、狩猟と晩年の竹鶴政孝さんは趣味が多彩であった。射止めた熊の写真に歌を自筆で書いていただいたこともあった。なかなかの達筆である。さて、ゴルフはと言えば、リタ夫人はシングル級の腕前で、存命の頃には、竹鶴さんは誘われても決してしなかったようである。負けるのが嫌だったのではと。負けず嫌いという強い信念をもつ、少年のような一面があった。ある会での出来事である。二ホールをバーで上がっての三ホール目、難しい下りのパットが残った。緊張気味に打ったパットがカップインした時は周りの人を驚かすほどの喜びようであった。その後、会に「三連続パー賞」が誕生した。



久金属最初の帳簿

昭和28年	アルミホイルによるキャップシール及びシール締機を我が国で初めて完成	1953	平成27年	創業百周年を迎える	2015
昭和26年	米国より射出成形機を輸入しプラスチック製品の製造を開始	1951	平成16年	滋賀工場においてISO9001認証取得	2004
昭和23年	厚生省、商工省の指定工場となる	1948	平成15年	本社においてISO9001認証取得	2003
昭和20年	終戦により満州、朝鮮の工場接収される	1945	平成13年	滋賀工場においてISO14001認証取得	2001
昭和19年	関係四社を吸収合併して資本金百万円の「久金属工業株式会社」に組織変更	1944	平成2年	石塚硝子株式会社との資本参加により、同社と業務提携	1990
昭和16年	満州国奉天市に工場を設置	1941	昭和54年	滋賀工場第二号棟増設	1979
昭和15年	朝鮮仁川市に工場を設置	1940	昭和46年	医薬品瓶用フリップオフキャップを我が国で最初に開発	1971
昭和9年	個人経営より「合名会社久金属製作所」に組織変更 現在地の大阪市西成区北津守に移転	1934	昭和44年	滋賀県甲賀郡(現甲賀市)水口町に滋賀工場第一号棟を設置	1969
大正14年	大阪市浪速区小田町に工場を増設	1925	昭和43年	資本金六千万円に増資	1968
大正8年	大阪市西区南堀江下通一丁目に移転	1919	昭和41年	我が国で初めてPPキャップのエンボス・シェーピングの技術を開発	1966
大正4年	大阪市浪速区桜川一丁目に、「久製作所」を創設 貿易用金属容器及びガラス瓶キャップの製造を始める	1915	昭和34年	神奈川県川崎市中丸子に東京工場(現東京支店)を設置	1959



久庄次郎 四十年の軌跡「冠罐歡」

発行／平成二十七年四月

久金属工業株式会社

大阪市西成区北津守三の八の三十一

監修／久 義裕

編修／池田 雅司